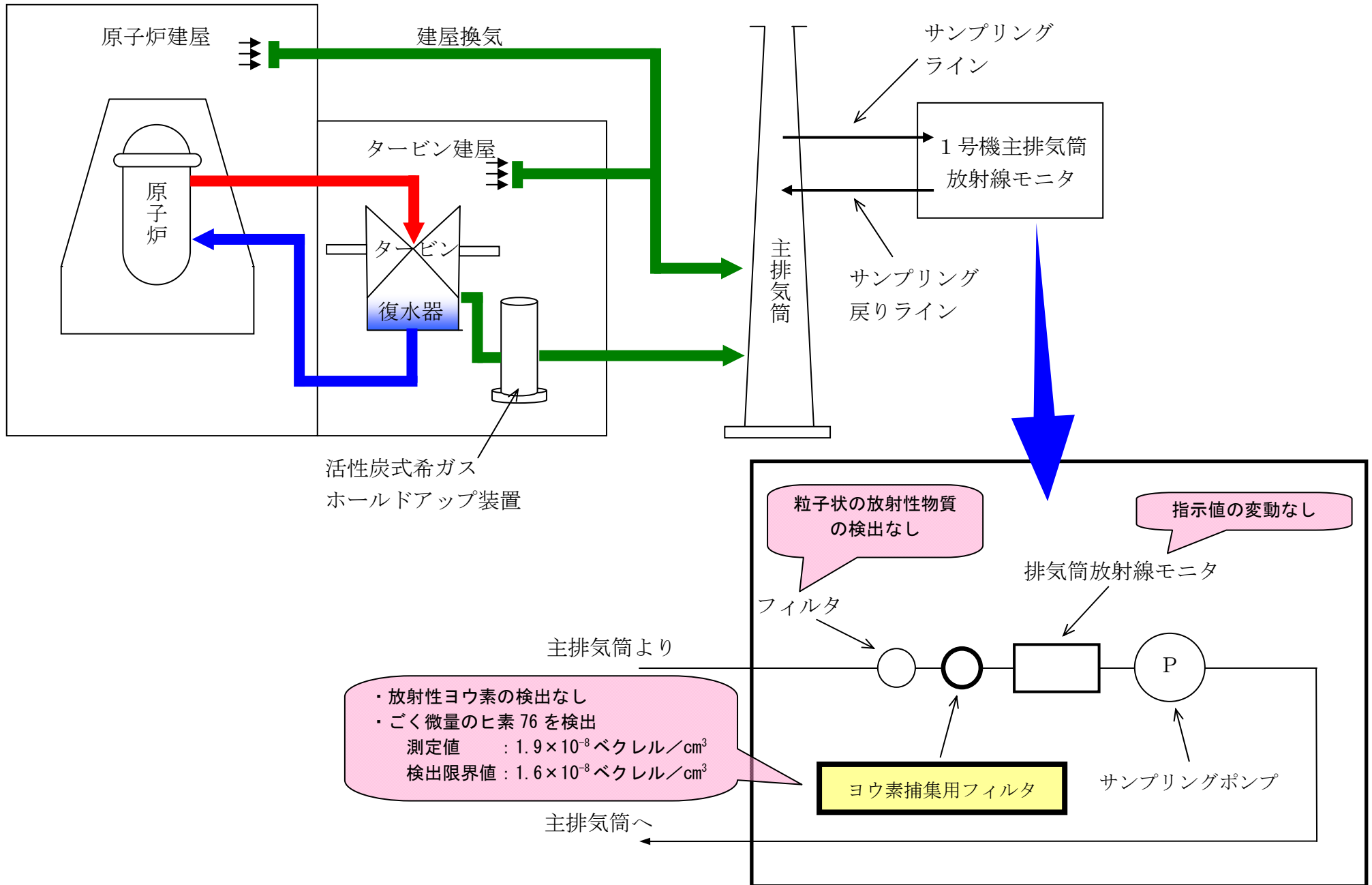


区分：Ⅲ（続報）

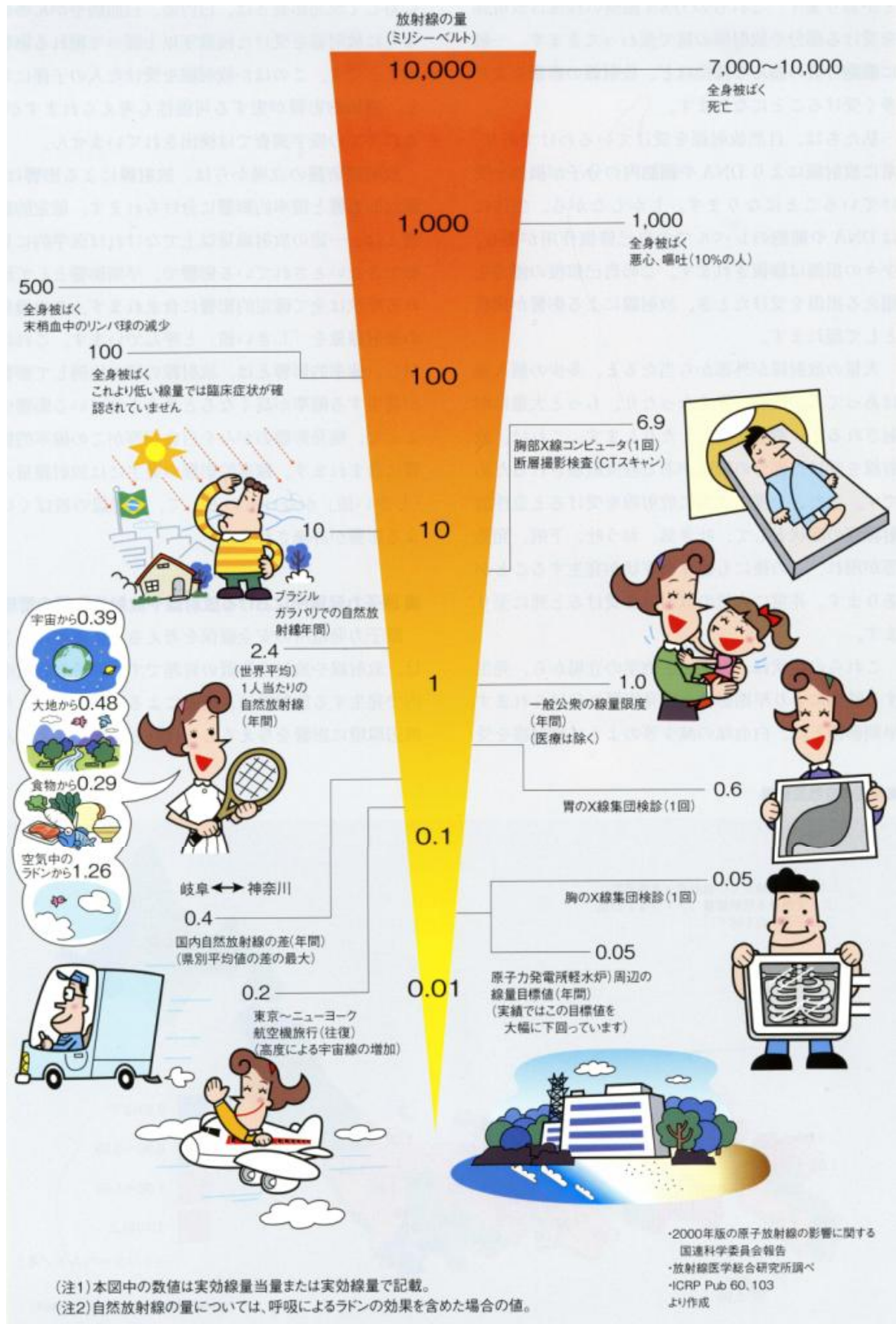
号機	1号機	
件名	原子炉冷却材浄化系ポンプ（B）室（管理区域）における水漏れについて（続報）	
不適合の概要	<p>定格熱出力一定運転中の1号機において、原子炉建屋地下4階の原子炉冷却材浄化系ポンプ（B）室（管理区域）で、配管への水張り作業を行っていたところ、水張り時に使用する空気抜き用配管につながる排水口から水（一部蒸気化）が漏れ出て、ポンプ室に漏えいしました。</p> <p>その後、配管への水張り作業のために開いていた空気抜き用配管の弁を閉めたことにより、水漏れは停止しました。</p> <p>今回の事象により、漏れ出た水（一部蒸気化）が再び凝縮し、ポンプ室床面に溜まりましたが、水は漏えいの拡大を防止するための堰内にとどまっており、堰内の床面に溜まっていた水の量は約9リットル、放射エネルギーは約1.1×10^7ベクレルでした。</p> <p>床面に漏れた水については、同日、拭き取りによる清掃を実施しております。 (公表区分Ⅲ：平成22年11月10日お知らせ済み)</p> <p>今回の水漏れ事象が発生した際に、排気筒モニタに変動がないこと、発電所敷地境界に設置され空間線量率を測定するモニタリングポストやダスト放射線モニタの指示値に有意な変動がなく、環境への影響がないことを確認しておりますが、その後、今回の水漏れによる影響を確認するため、排気筒モニタのサンプリングラインに設置している放射性物質を捕集するためのフィルタについて、通常は1週間に1回測定を行うところ、今回速やかにフィルタを回収し測定を行いました。</p> <p>測定の結果、放射性のよう素や粒子状物質は検出されませんでした。放射性のよう素を捕集するフィルタの測定において、ごく微量のヒ素76*が検出(検出限界値1.6×10^{-8}ベクレル/cm³に対し、測定値1.9×10^{-8}ベクレル/cm³)されました。</p> <p>ヒ素76は半減期が1.1日と短いため、周辺環境における線量への影響も小さく、今回検出された放射能濃度をもとに線量評価を行った結果は約9×10^{-11}ミリシーベルトです。これは、自然界から1年間に受ける放射線量2.4ミリシーベルトと比べても十分低い値であり、胸のエックス線検診(1回)で受ける放射線量(0.05ミリシーベルト)の約5億分の1です。</p> <p>* ヒ素76 自然界にも広く存在する元素のひとつであるヒ素が、原子炉水中で中性子の照射を受けて放射化したもの。運転中の1号機の原子炉水中には約1ベクレル/cm³存在している。</p> <p>ヒ素は、一般に有害物質とされているが、ごく微量ながら人体にも含まれており、食品を介して1日平均で約0.1mgを摂取している。仮に、今回放出したと想定されるヒ素76全量(1×10^{-8}mg)を摂取したとしても、1日の食品からの摂取量の1千万分の1程度と評価されることから、人体への影響はない。</p>	
安全上の重要度／損傷の程度	<p><安全上の重要度></p> <p>安全上重要な機器等 / その他設備</p>	<p><損傷の程度></p> <p><input type="checkbox"/> 法令報告要</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 法令報告不要</p> <p><input type="checkbox"/> 調査・検討中</p>
対応状況	<p>今回の事象は、一部蒸気化した水に含まれていたヒ素76が換気空調系から排気筒に至った可能性があるものと考えておりますが、引き続き調査を進めてまいります。</p>	

主排気筒モニタの概要



1号機主排気筒放射線モニタ

日常生活における放射線量との比較



本事象における放射線量

約0.000000000009ミリシーベルト